

【研究ノート】

教養への回帰

平松 琢 弥

The Return to the Culture

Takumi HIRAMATSU

Today, people, as well as the society, are exposed to many problems threatening the continuation of the society and live in distrust and uneasiness without having the future prospects. On this account, they lose a feeling of solidarity and a sense of unity. The society without them cannot solve any problem. To do so, certain common sense of values, which bring people together and breed a feeling of solidarity and a sense of unity, are essential in the society where each individual's sense of value is different. In such society, the culture can be the common sense of values.

This paper firstly points out that each person has different sense of value, loses opportunities of communication, and stands alone in the society. Hence, people and the society lose a feeling of solidarity and a sense of unity. Next, we survey characteristics of the culture and explain that the culture can become the common sense of values for people and the society. Thirdly, we discuss what is expected for the culture today, and lastly describe ways to obtain knowledge, the basis of the culture, in order to enhance the culture.

キーワード：教養、知識、人間性、徳性、感性、知性、同化、総合化、ものの見方、価値観、連帯感・一体感、社会、知恵、全体、本質、多面性、信頼、相互理解、未来、進むべき道、哲学、歴史、文学、異質、現実

1. はじめに

グローバル化や情報化の進展、科学技術がつぎつぎと生み出す新しいモノやサービスの出現により、今日の社会は多様化、複雑化し、変化が常態化している。人の価値観は分散化、個別化し一人ひとり異なる。社会は専門化、分業化が進み多面的になり、人や社会の相互理解を難しくしている。人は常に競争場裏に置かれてコミュニケーションを喪失し、社会の中で孤立している。また、国や地方の財政赤字、年金・医療などの社会保障制度の危機、教育現場の崩壊、少子高齢化の進展、環境汚染、社会格差の拡大など、日々の生活や社会の存続を危うくする幾つもの社会問題に曝され、人は将来の展望を持ちえず不信と不安の中にいる。このため、社会には喪失感、閉塞感、不安感が漂い、人や社会は連帯感・一体感を喪失している。連帯感や一体感のない社会は何事も成しえない。百家争鳴し、議論ばかりが先行し、人の意見はまとまらず、社会の進むべき方向が定まらない。今日の社会問題はど

れ一つをとってみても、様々な要因が複雑に絡みあった難問である。これらの難問を解決していくには、社会の人びとが意見の違いはあっても小異を捨てて大同につき、連帯し、一体となって問題解決に取り組むことが必要不可欠である。まずは、人や社会の中に連帯感・一体感を醸成しなければならない。それには、一人ひとりの価値観が異なる社会の中心に、誰をも惹きつけることができる「何か」が要る。

ところで最近では、「教養」*¹ という言葉をあまり聞かない。いまでは古ぼけたカビ臭い言葉になってしまっているような気がする。一昔前まで、教養という言葉は社会のすべての人々から畏敬のまなざしで見られ、ある種の重みと尊厳があった。教養という言葉には地位や権力としてではなく権威として、人がついていってもよい、ついていこうと思わせる力、人をつき従わせる力があつた。しかし、科学技術や実学が台頭し、人や社会がモノや金など経済中心志向になり、すぐに就職や仕事に役立つ専門的、職業的知識を強く求めるようになった。それにつれ、専門や職業の枠を超えて共通に求められる知識、人間の精神を豊かにするとか人格や品性を高めるといった一見すぐには役に立たないあるいはいつ何の役に立つかもわからないと思われた教養は軽んじられ、廃れていった。

今日の社会問題の遠因は、昨今の人や社会においてこの教養が劣化もしくは欠落していることにあるのではないかと思われる。本来、教養ある人や組織はそれぞれの社会的地位に見合った役割や責務を自覚し、ものごとの全体、本質、多面性を正しく捉え、ものごとを他人中心的に処理しなければならない。ところが、昨今の人や組織は社会的役割や責務の自覚を欠き、ものごとを部分的、一面的、自己中心的に処理してきたところがある。今日の社会問題は、この歪みが社会の変化にともない顕在化し、その綻びが露呈してきた結果であろう。そして、その綻びが人を不信と不安に陥れ、人や社会の中に連帯感・一体感を醸成することを阻んでいる。そこで、人や社会の共通の価値観としてその中心に置き、誰をも惹きつけ、人や社会の中に連帯感・一体感を醸成しうるものとして「教養」がある。古くて新しい言葉、教養の再発見と教養への回帰が必要ではないかと考える次第である。

本稿では、まず今日の社会状況について述べる。人が価値観を異にし、コミュニケーションの機会を失い、社会で孤立し、人や社会が連帯感・一体感を喪失していることを示す。つぎに、教養が育まれる道筋、教養ある人の社会における在り方、教養ある人に求められる力、教養と知恵の関係の考察をとおして教養とは何かについて概観する。その上で、教養が人や社会の共通の価値観となりうること、そして人や社会に連帯感・一体感を醸成しうることについて論証する。つづいて、今日の教養に何が求められているかについて論じる。一つは人や社会に連帯感・一体感をもたらす役割であり、もう一つは未来を拓く役割である。最後に、いかにして教養を高めるかについて示す。教養の基盤は諸々の知識であり、これらの知識をいかにして身に付けていくかその手立てについて述べる。

2. 今日の社会状況

人や社会は物質的には豊かになったが、一人ひとりが価値観を異にし、隣の人がしていることを知らずにも知りえず、人や社会とコミュニケーションを取ろうにも取りえず、社会において孤立せざるをえない状況に置かれている。さらに、不祥事*²や社会の存続を危うくするような問題がつぎつぎと身の回りで起こり、人を不信と不安に陥れている。このようなことから、人や社会は喪失感、閉塞感、

不安感に覆われ、連帯感・一体感を喪失している感がある。

(1) 個別化する価値観

今日、人は気儘な自由と物質的な豊かさを享受している。社会の一定のルールを遵守していれば、何をしようとも他人から口やかましく注意をされたり、アレコレと咎め立てされたりすることもない。モノやサービスは身の回りに溢れ、自分の欲しいものを自由に選択し入手できるようになった。この人が手にした気儘な自由と物質的な豊かさは、人の生活様式など外面のみならず、ものの見方や考え方、価値観や人生観など人の内面さえも変えてきた。気儘な自由に慣らされた人は、自己中心志向となり自分のことにしか興味がなく、他の人のことに関心をもたなくなった。人の価値観や人生観は分散化、個別化し、十人十色となってきている。

(2) 途絶するコミュニケーション

知識社会の到来といわれている。知識は高度化し、細分化、専門化が進んでいる。社会は専門を異にするいろいろな人や組織で多角的に構成されるようになった。それぞれが使う言葉は専門的になり、門外漢がそれを理解するには難解なものとなっている。さらに、専門ごとに価値ありとするもの、重視するもの、評価するものが異なる。その結果、一般の人と専門家の間、専門家の間でも分野が少し違えば意思の疎通をはかり相互理解をすることが大変難しくなっている。知識社会は新しいモノやサービスを生み出し人の生活を便利にしてきたが、一方では人や社会のコミュニケーションを途絶させる傾向にある。

(3) 孤立する人びと

また、社会はモノや金など経済中心になっている。産業主義や商業主義、成果主義や功利主義がはびこっている。人の流動化が進み、地域や企業コミュニティが解体されている。ワーキングプア^{*3}に見られるように貧富の格差が拡大している。人は何処にいても常に競争場裏におかれ、自分のことで精一杯になっている。人を助けたり、社会全体のことを思いやったりする余裕を失っている。また、インターネットや携帯電話など情報通信技術の進展は人と人が直接的に接する機会を減少させ、人間関係の希薄化を招いている。このように、人は社会の中で孤立して存在せざるをえない状況に追い込まれている。

(4) 行き場のない不信と不安

さらに、国や地方の財政赤字や年金・医療などの社会保障制度の危機、少子高齢化と労働人口減少、医療、教育現場の崩壊、社会格差の拡大など社会の存続を危うくする問題がつぎつぎと顕在化している。また、いずれの業界であるかを問わず不祥事が多発している。これまで、人は国や企業に絶大な信頼を寄せ、身を委ね、後ろを顧みることなく一心不乱に前を向いて生きてきた。しかし、今日ではつぎつぎと梯子を外されている感がある。人や社会を信じることができず、自分の将来展望が見えず不信と不安の中にいる。いまや人は、何を信じ、何に頼ってよいか分からなくなっている。

3. 教養とは何か

教養とは何かと問われると、人それぞれあるいはその文脈においていろいろな答えがあるだろう。しかし大きくは、教養とは広く深く知識を身につけ、一人ひとりがその社会的役割にふさわしい知識や人間性を備え、人や社会に貢献する意思をもつことではないだろうか。また人は、人や社会と関わりをもちそれらに貢献する動きをすることにより自分自身の人生を充実させ、それを意義あるものと感じることができるのではないだろうか。

以下、いくつかの教養に関わることがらの考察をとおして教養とは何かについて概観する。3.1では教養が育まれる道筋、3.2～3.3では教養ある人の社会における在り方、3.4～3.5では教養ある人に求められる力、3.6では教養と知恵の関係について述べる。

3.1 教養とは知識や人間性を基盤とする

人は人文科学、社会科学、自然科学などいろいろの学問^{*4}を学び、絵画、音楽、芸能などの芸術について造詣を深め、人間的修養や人生経験を積んで諸々の知識を体得していく。自分なりに一つひとつの知識を理解し、解釈し、洞察し、選別し、同化し、他の知識と関連付けし、統合し、体系化していく。そして、これらの知識が人の内面で総合化され、その人の人間性^{*5}を涵養していく。人間性とは人が人であることの本質であり、徳性、感性、知性からなる。徳性とは、「人を愛する」「人を思いやる」「人を助ける」「人に尽くす」などといった道徳心^{*6}であり、感性とはものごとを心に深く感じ取る能力、知性とはものごとを理解し、考え、判断する能力である。徳性、感性、知性が揃うことで人間性は豊かになり、深みを増し、輝きを放ち、人を惹きつけることができる。そして更に、人間性を形成する徳性、感性、知性が相互に作用し、融合してその人のものの見方や価値観を醸成していく。

ものの見方や価値観は、言葉、振る舞い、ものごとの判断、行動などの「カタチ」となり人の外面に滲み出していく。世の中の人はその人を見てその人の知識の広さや深さ、品性や人格、見識^{*7}の程度を感じとり、あの人は教養があるとか、教養がないとかという。そして、人はそこに広く深い知識、優れた品性や人格、高い見識を見いだせば、教養ある人として信頼し、尊敬や畏敬の眼差しを向ける。その人の言葉や行動を信頼し、その人が示す方向についてもよい、ついていこうと考えるものである。教養が育まれる道筋を図1に示す。

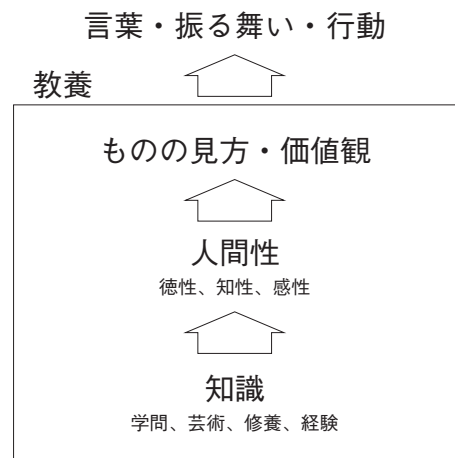


図1 教養とは

3.2 教養とは「人のために生きる」ことである

人は個人的生物であると同時に社会的生物である。一人で生きていく孤独には耐えられない。何をするにも人の助けを必要とする。だから、人は他の人と社会を形成している。人は生きやすくするため、社会をより良いものにしようとする。しかし、どのように良くしていくかは相手がいる話であり、

自分の一存では決められない。自分の望むようにしたければ他の人の協力がいる。協力を得るには信頼が得られなければならない。そのためには、自分が他の人にとってためになる存在でなければならない。すなわち、自分がより良く社会で生きるには、自分は他人のために生きる存在でなければならない。このことは、「人のために生きる」ことが、人のありようの本質であることを示唆している。しかし、「人のために生きる」ということは並大抵なことではない。なぜなら、人はもともと個人的生物であるがために自分中心であり、一方社会的生物であるという点からは他人中心でなければならないという矛盾の中に生きている。「人のために生きる」ということは、自分の感情や欲望、邪念に打ち勝ち、この葛藤を解消することを人に求めている。

安岡正篤は、その著書「運命を開く」において「知識だの技術だのというものは、あるに越したことはありません。これを発達させたから、偉大な今日の文明も生じたのでありますが、しかしこれがなかったからといって、つまり、知識や技術が少々未開発であるからといって、人間たることにそう根本的な価値の影響はありません」*⁸と述べ、人として一番大事な本質は徳性であるとしている。たしかに、いくら感性、知性に恵まれていても徳性が欠落していればついていく人はいない。しかし、徳性がいくら備わっていても、感性、知性に乏しい無知の人でも困る。人が感性、知性に乏しければ、社会の進歩、文化・文明の発展を望むべくもないことも明らかである。

教養ある人とは、自分の感情や欲望、邪念に打ち勝って自我を捨て「人のために生きる」ことが人の在り様であることをわかまえ、それがまた自分自身の人生をより良く生きることに繋がっているということを知っている人のことではないだろうか。

3.3 教養とは社会的責務を果たすことである。

阿部謹也は、その著書「教養とは何か」において、教養とは「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」と定義している。^{*9} このことからすれば、教養にとって知識の多寡は本質的ではない。知識が少なくても自分の社会での位置付けをわかまえ、社会的な役割をキチンと果たしている人がいる。一方、知識を多くもってはいても自分の社会での位置を自覚せず、社会の約束や決まりを逸脱して、なすべきでないことを為したり、なすべきことを為さず放置したりする人が少なからずいる。

とはいえ、知識は多いに越したことはない。たとえば、知識を多く持っていればいるほど、ものごとを理解する、本質を見抜く、先を見通す、新しい価値を生み出すといった能力、すなわち理解力、洞察力、先見力、創造力といった知性を高めることができる。すると、人や社会との関わりを広げ深め、人や社会に対して多くの貢献をすることができる。しかし、いくら知識を身に付けていても、その使い方を間違ってしまうとはどうしようもない。知識は使われると力になる。正しく使えば人や社会に幸福をもたらすが、使い方を間違えると不幸や混乱をもたらす。たとえば、原子力はエネルギー資源として使えば人の役に立つものとなるが、兵器として使われれば大量殺戮の道具となり人に甚大な不幸をもたらす。また、今日の人の生活や社会の継続を危うくする諸問題は、その職責にあった人や組織の知識が不足していたこと、ものごとを自己中心的、部分的、一面的に処理してきたこと、あるいは今日の事態あることは大よそ分かっていても拘らずなすべきことを為さず問題を放置してきたことに起因しているのであろう。もちろん、不祥事などは自分の社会的な位置を忘れて私利私欲に走ったがために起きていることであり、論外である。

教養とは、ものごとの正邪、善悪、利害をわきまえ知識を正しく使うことである。また、ものごとの本質を見抜き、先見性を有して事に当たることである。そして、自分の社会的な位置に見合った社会的責任と義務をきちんと果たすことである。一つには、人や社会に害をなさない責任である。二つには、人や社会に貢献するという義務である。端的に言えば、「なすべきでないことを為さず、なすべきことを為す」ことである。

3.4 教養とはものごとの真の姿を捉える力である

「なすべきことを為す」ためには、何をなすべきかが分かっていなくてはならない。そして、なすべきことについて正しい判断や決定をするには、ものごとの真の姿が見えていなくてはならない。したがって、教養ある人はものごとの真の姿を捉える力を備えていなくてはならない。ものごとの真の姿とは、第一にはものごとの全体であり、第二にはその本質である。

(1) 全体を見る

人は自分の立場や関心に沿ってものごとを見る。また、自分の知識をとおしてもものごとを見る。このことは言い換えると、自分の立場や関心、そして知識の範囲でしかものごとを見ることができないということである。自分の立場や関心に固執したり、知識が不足したりしていると全体の一部分しか見ることができない。にもかかわらず、自分の見たものこそが全体だとする。その結果、ものごとの判断や決定を誤ってしまう。ものごとの全体を見るには、自分の立場や関心の所在に固執することなく私心を忘れ、虚心坦懐に主観を離れ客観に就かなくてはならない。また、ものごとの全景を視野に収めることのできる十分な知識を身につけていかなければならない。たとえば、人が象を見るとき象の耳しか見えなかった人は大きな丸い団扇のようなものと考え、足しか見えなかった人は太い丸太のような形をしたものだと思い、尻尾しか見えなかった人は細長い綱のようなものと考え。部分としては間違っていないが、象そのものではない。ものごとの全体を見ることができたら、象が単に団扇のようでも、丸太のようでも、綱のようなものでないことはすぐ分かる。

全体とは部分の集合ではない。部分を単純にいくら寄せ集めても全体にはならないということである。人はものごとを理解しようとするとき、全体を部分に分解し、最後に部分を寄せ集めて全体を把握しようとする。たしかに、この方法は複雑なものごとに対する理解を助ける有力な手段ではある。しかし、全体に近づくことはできても全体にはならない。なぜなら、部分にはそれぞれに固有の機能、働きがあるが、全体とはそれらの部分が有機的に相互に連携し、状況に応じ協調、協働して生み出す新しい機能、働き、価値である。いわば、部分の集合は部分の単純加算にすぎないが、全体とは部分の掛け算である。先ほどの象の話においてもそうである。耳、足、尻尾にはそれぞれの機能、働きがあるが、象とはそれらが相互に連携し、協調、協働して生み出す新しい機能、働き、価値である。また、桜は春に咲き誇る美しい花であるが、春の穏やかな、日和がよい日に咲く桜の美しい情景、雰囲気、それを構成する木、花、空、光、空気など部分をもって言い尽くすことは至難である。ものごとの全体を捉えるには、全体を俯瞰し、知覚し、感じるしかない。

(2) 本質を掴む

人は、とかくいま音がしたところや目の前にあることに意識が向くものである。しかし音がしたと

ころや目の前にある表面的な現象に意識がとらわれていては、本質をつかむことはできない。一呼吸おいてものごとを見つめ直さなければならない。第一にその現象が意味するところは何なのか、人や社会に及ぼす影響を知らねばならない。第二にその現象をもたらしている根元は何なのかである。すなわち、本質をつかむとは、現象が意味するところと現象をもたらしている根元との関係を明らかにすることである。

本質をつかむことなく表面的な現象に意識を奪われてものごとを判断すると、人や社会が進むべき道の選択を誤る。また問題への対処は対症療法にとどまり、却って問題を一層複雑にするのみである。本質を掴むことの意義は、ものごとの根元を突きとめて最も効果的かつ効率的に事を処すことである。言い換えるならば、人や社会が大切にすもの、守るべきものを明らかにし、そこに焦点を絞って資源を投入して人や社会の問題を抜本的かつ迅速に解決することにある。ものごとの真の姿を捉えるには、本質を掴まなければならない。

3.5 教養とはものごとの多面性を読み取る力である

ものごとにはいろいろな側面がある。ものごとの全体や本質を捉えて正しい判断や決定をするには、ものごとには多面性があるということを認識し、それらの視点からの考察が十分に行われていなければならない。すなわち、教養ある人はものごとの多面性を読み取る力を備えていなくてはならない。たとえば、第一にはものごとの見え方は立場によって異なるということ、第二にはものごとの意味や価値はものごとの見方や価値観によって変わるということ、第三にはものごとには何事であれ光と陰の両面があるということ、第四にはものごとは時がたてば必ず陳腐化することを知らなくてはならない。

(1) ものごとの見え方は立場によりちがう

富士山は静岡県と山梨県に跨る美しい山であるが、どこから眺めるかで富士の形や姿はかわってくる。また、自分の身近にある物体も視点が違えば別の物に見えるときがある。それと同じように、ものごとは見る立場が異なれば、その見え方はちがったものになる。社会における人の立場は一人ひとりちがう。したがって、人が常に自分と同じものを見ていると考えてはいけぬ。人が何を見ているかを知るには、その人の立場に身を置いて考えてみることである。

(2) ものごとの意味や価値はものごとの見方により変わる

雪をいただいた富士山を見て、美しいと感じる人もいれば、冬が来たなと季節を感じるだけの人もいる。日本の宝と思う人もいれば、ただの大きな山だと思ふ人もいる。また、コップに入っている半分の水を見て、半分しか入っていないと思ふ人もいれば、半分も入っていると思ふ人もいる。困難を人生の糧と考える人もいれば、ただの労苦と考える人もいる。すなわち、ものごとの意味や価値はものごとの見方や価値観によって変わってくるということである。社会にはいろいろなものごとの見方や価値観の人がいる。自分の価値観だけでもものごとの意味を解釈し、価値を判断していると独善となることを免れない。

(3) ものごとには光と陰の両面がある

ものごとには必ず光と陰、表と裏、メリットとデメリット両面がある。たとえば、科学技術はいろ

いろなモノやサービスを生み出し人の生活を便利で豊かにしてきたが、一方では自然環境の汚染や資源枯渇の問題を生み出している。また、インターネットは人や社会にいろいろな利便を提供する利器ではあるが、新しい犯罪の温床として人々の生活を混乱させたり、諸々の社会活動を阻害したり、治安を悪化させたりする危険性をはらんでいる。すなわち、あるものごとから何らかの利を享受しているとすれば、その利を享受しているところの裏側でそれと対になった何らかの害が生まれ成長している。いずれ、何らかの代償を支払わなければならない。何であれ、ものごとには光の側面と陰の側面があることを忘れてはならない。

(4) ものごとは必ず陳腐化する

ものごとは時がたてば必ず陳腐化する。今日の新しいビルも明日には老朽化したビルとなる。また、今日の時代に適合した社会の制度も明日の時代には不適合なものとなる。しかし、人は自分が手にした新しいものは、永久に変わることなくいつまでもその新しさや価値を保ち続けると思いがちである。ところが、ものごとは時とともに色褪せてその価値を失っていくものである。今日の資産が明日の負債に変わり、今日の喜びが明日の苦痛に変わることを知っておかねばならない。すなわち、時の経過や状況の変化が今日の新しいものごとを、明日には古いものにしてしまうということを知っておかねばならない。

3.6 教養とは知恵の母胎である

人や社会は今まで経験したことのない問題に直面したとき、既存の方法で解決できないならば、何とかしてそれを解決できるアイデアあるいは方法を見いださなければならない。いわゆる知恵が求められる。知恵とは、目的と状況に応じて知識を使いこなし、臨機応変に問題への対処方法を見つけ出すことである。では、知恵はどのようにして生まれてくるのであろうか。

アメリカの広告業界の権威であったジェームス・ウェブ・ヤングは、アイデア作成の原理として二つのことを上げている。一つは、「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」ということ、もう一つは「既存の要素を新しい一つの組み合わせに導く才能は、事物の関連性を見つけ出す才能に依存するところが大きい」ということである。^{*10} すなわち、アイデアとは無から有を生じさせるものではなく、すでに自分の中に蓄えている知識と知識の間に新しい関係性を発見することであるとしている。そして、この新しい関係性の発見は、一つのものごとと他のものごととの間の関連性や類似性を見つけることに等しいとしている。たとえば、自然科学の世界に今までにない機能や特性を発揮する新素材を開発する仕事があるが、新素材は全く何もない無の世界から創造されるものではなく、自然界に存在する原子や分子が持つ特性の新しい組み合わせを発見することにより生み出されるにほかならない。アイデアが「既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」ことの事例である。

また、田村正紀はその著述「今から教養を身につけるにはどうすべきか」^{*11}において、「人間は知恵を必要とするとき、今まで経験したことがない特異な問題を解かねばならないときには、分析よりもむしろアナロジー（類似、相似）を求めることで乗り越えてきた。アナロジーを豊かにする土壌が、歴史や文学、哲学である」と述べている。すなわち、人や社会が困難に直面したとき、教養がそれを解決する知恵を生み出してくれるのであるとしている。

すなわち、教養とは知恵の母胎である。教養は人や社会が既存の方法では解決できない問題に遭遇したときあるいは今まで経験したことがない特異な問題を解かねばならないとき、目的と状況に応じて臨機応変にその問題を解決する知恵を生み出してくれる。

4. 教養は共通の価値観になりうるか

人や社会に連帯感・一体感があれば、何か異変があったとしても問題認識、対策立案、行動などの合意形成を迅速におこなうことができ、社会に大きな混乱をもたらすことなく問題解決に向けて前進することができる。しかし、連帯感・一体感なければ百家争鳴し、人々の意見はまとまらず、社会の進む方向は定まらず、何事もなしえない。そのうちに問題は忘れ去られ、放置され、傷口を大きくし、将来に禍根を残すということはよくあることである。

たしかに、今日のように一人ひとりの価値観が異なり、コミュニケーションを喪失し、社会で孤立し、不信と不安の中にいる人々の間に連帯感・一体感を醸成するのは難しいことではある。とはいえ、人や社会が今日の社会の継続を危うくしている諸問題を解決し、さらには今後これまでに遭遇したことのない難問に対処していくためには、人や社会の中に連帯感・一体感が存在することが何にもまして必要である。そのためには、人や社会の中心に、価値観の異なる人を惹きつけることのできる「何か」が要る。それは一人ひとりの価値観や立場の違いを超越し、共通の価値観となりうるものでなくてはならない。そして、社会で孤立している人々の間にコミュニケーションを回復させ、相互理解をもたらし、人や社会に連帯感・一体感を醸成させてくれるものでなくてはならない。そこで、教養ならばこの「何か」に成りえるのではないかと考える次第である。

なぜなら、教養は中立的であり価値観や立場の違いを超越しているものである。したがって、教養ならば図2に示すように、共通の価値観として一人ひとりの価値観が違う人や社会の中心に置いたと

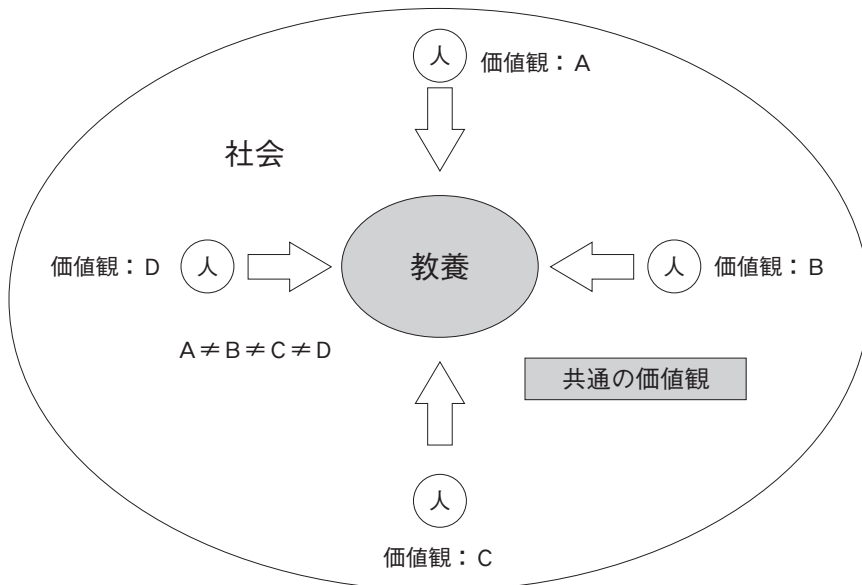


図2 教養を人や社会の中心に置く

しても、人々の間に何の利害関係も生まないし、社会の中に相克や対立を生じさせることもないだろう。また、教養を共通の価値観とすることの意味は、社会の一人ひとりが自らの知識や人間性を高め、それぞれの社会的役割に応じて人や社会に貢献することを共通の人生の目標にしようということである。今日の変化の激しい社会の中で人は翻弄され、「私は誰、いま何処にいるの、何をしているの、これからどうすればいいの」などと自分を見失い、いかに生きていけばよいか分からず悩んでいる。今、多くの人がいかに生きるかということについての拠り所を求めている。このような時、教養を共通の価値観とすることは、人々に対し一つの生きる指針を与えることであり人々にとって大きな心の拠り所となるであろう。さらに、何が起るかわからない人生のいろいろな場面でものごとを考えるとき、自分の一番身近な相談相手として頼りにできるものである。生きる力と道標を与えてくれるものである。また、人生の幅を広げ豊かにしその質を高めていくことに大いに役立つものである。したがって、知識や人間性の水準を高め、教養を深めていくことを人生の目標の一つとすることに戸惑いのある人はいないであろう。一人ひとりの知識や人間性の水準が上がるということは、社会全体の水準が上がることであり、そのことは社会基盤を強めることにもつながる。そして、人や社会が教養という共通の価値観を手に入れば、それが足がかりとなって社会で孤立している人々の間のコミュニケーションが回復し、相互理解が進み、人や社会の中に一体感・連帯感が醸成されてくるだろう。このようなことから、教養を人や社会の共通の価値観としてその中心に置くことに対し、ほとんどの人は抵抗感や異論なく賛同してくれるのではないだろうか。

5. 今日の教養に求められること

教養は身を飾り、人に見てもらい、自慢をし、人からの尊敬を集めるだけのものであってはならない。人や社会の役に立ってはじめて意味をもつ。今日の社会は共通の価値観をもちえず、連帯感・一体感を喪失している。また、これからの時代は変化が常態化し先行きが不透明、不確実である。人は何処に行くのか、何をすればよいか分らなくなる。

このような時代にあって、教養には二つの役割が求められる。一つは、社会に連帯感・一体感をもたらす役割である。そのためには、教養は人や社会から信頼され、人や社会に相互理解をもたせなければならぬ。もう一つは、未来を拓く役割である。先行きが不透明、不確実な未来をいち早く人や社会に知らせ、進むべき道を示す役割である。

5.1 連帯感・一体感をもたらす

(1) 信頼が得られること

今日、教養は本当に人や社会の役に立つものであるかどうか疑われている。あまりに、人を不信と不安に陥れるものごとが横行し、その信頼を失っている。教養も人や社会からの信頼が得られなければ、人や社会の力を一つに結集することはできない。信頼とはなにか。信じて、頼ることである。では、人は何を信じ、何に頼るのか。「信じがい」や「頼りがい」を、人は何処に見いだしているのだろうか。まず、「信じがい」は人である。人としてとして信じられるかどうかである。「頼りがい」は能力である。能力として頼れるかどうかである。この二つが相俟ってはじめて人から信頼されるものとなる。人として信じることができても、能力がなければただの善き人であり、能力があっても、

人柄が良くなければ人はついていけない。

信じられる人とは誠実な人である。誠実とは、言動に嘘・偽りなく、私心なく、真面目に、責任感を持ち、約束したことに取り組むことである。さらに、人の思いを汲み取って、思いやりをもって尽くすことである。すなわち、人を中心においてものごとを考える人である。人のために生きることができる人である。人は自分の話に耳を傾け、自分を受けとめてくれる人に心を開く。頼りになる人とは、ものごとを為す能力をもっている人である。では、何を見て能力を推し量るのか。ものごとを成すには、第一はものごとを正しく認識すること、第二は何をなすべきか優先順位を決め課題を設定すること、第三には課題解決の方策を提示できること、そして最後に実行できることである。人はその人のものの見方や価値観、知識や技術、言葉や行動、仕事の仕方や実績を見て、ものごとを為しうるか否かを見て取る。

ふつう一般の人は、社会でものごとを決定する権限を持つ地位の高い人は教養があると思っている。そのような人の人との接し方や扱い方、ものの見方や価値観、言葉や行動は教養の表象である。それらをとおして教養とは何かを理解し、その価値を推し量っている。今日、多くの人は社会の状況を見て残念ながら教養に対して深い疑念をもち信頼を置いていない。「ノブレスオブリージュ」*12 という言葉がある。「貴族たるもの、身分にふさわしい振る舞いをしなければならぬ」の意である。国の政治、経済、社会を動かす立場にある政治家、企業経営者、官僚はもちろん、人の生活や仕事、社会活動に日々関わりがある行政や企業、教育、医療機関などの組織を運営する立場にある人々の責務は重い。人や社会はそれらの人の背中に教養を見ている。教養が人や社会から信頼されるものとなるためには、社会のリーダーたるこれらの人々の「ノブレスオブリージュ」の実践と人や社会への実質的な貢献が強く求められる。

(2) 相互理解をもたらすこと

知識社会では専門を異にするいろいろな人や組織で多元的に構成され、それぞれが使う言葉が違う。また、価値ありとするところが専門ごとに違う。その結果、一般人と専門家の間はもちろん、専門家の間でさえ分野が少し違えばお互いが何をしているのか知りえず、理解できず、意思の疎通をはかることが難しくなっている。ときには、無関心になっている。このため、知識社会では人と人、人と組織、組織と組織の間のコミュニケーションが途絶する傾向にある。人や社会に連帯感・一体感を再生させるには、人や社会にコミュニケーションを回復させなければならない。それには、他の人や組織が何をしているかを知り、そのことの人や社会における意味を知りえなくてはならない。P.F.ドラッカーの言葉を借りて言うと、『われわれは専門知識のそれぞれについて精通する必要はないが、それが「何についてのものか」「何をしようとするものなのか」「中心的な関心事は何か」「どのような新しい洞察を与えてくれるのか」「それについて知られていないことは何か」「問題や課題は何か」を知らなければならない。』ということである。*13

グローバル化、情報化はとどまることなく進展し、ものごとの変化は地球規模で瞬時に人や社会に影響を及ぼす時代になっている。また、科学技術の進歩は著しく、最近では生命科学の進歩により人の生命にかかわる安楽死、臓器移植、遺伝子操作など一般の人には理解と判断の難しい倫理的問題が浮上している。このように、人や社会が直面する問題はますます広域化、複雑化、専門化し、一般の人がその意味を理解し、その是非を判断することを難しくしている。そのため教養ある人は、もの

ごとを一般の誰もが分かる平易な言葉を用い、簡単な論理で、人や社会の関心のあるところに沿って説明できなければならない。たとえば、専門家が素人に自分の仕事や技術について話すとするなら、専門用語を用いて仕事や技術の詳細（HOW）を伝えるのではなく、その目的や結果が人や社会に及ぼす影響など人や社会との関わり、人や社会の関心があること（WHAT）について伝えなくてはならない。

教養は政治、経済、社会、科学技術など諸般の専門知識を一般知識に翻訳し、ドラッカーの指摘する問いに答え、専門家と一般の人が一緒に論考し合える共通の場を作ることができなければならない。そして、人や社会の中にコミュニケーションを回復し、相互理解をもたらすことが今日の使命である。

5.2 未来を拓く

(1) 未来を知らせる

知識の本質はものごとを「変化」させることにある。したがって、知識社会においては、変化が常態となり、未来がいかなるものであるかは不透明、不確実である。未来が不透明、不確実では、人は今日何をすればよいのか戸惑うばかりである。もし、未来を知ることができ、知りえた未来が芳しいものでなければ、人や社会はそのような芳しくない事態を未然に防いだり、その影響を軽減したり、事前に何らかの準備をすることができる。P.F.ドラッカーは、未来を知る方法についてつぎのように述べている。「未来を知る方法は二つある。一つは、自分で創ることである。もう一つは、「すでに起こった未来」*¹⁴ すなわち、すでに起こった事柄や事象の帰結を見ることである。そして行動に結びつけることである。あらゆる出来事は、その発生と、インパクトの顕在化とのあいだにはタイムラグがある。したがって、たとえば出生率の動きを見れば、少子高齢化の到来は誰の目にも見えたはずだ。対策もとれたはずである。」としている。未来を知る方法はこの他にも、ものごとのトレンドを探る、歴史に学ぶなどの方法が考えられる。

しかし、いくら未来を知る方法論を手にしたところで、人や社会に未来を知ろう、読み取ろうとする意思がなければ未来は知りえない。まず、読み取る意思を持たなければならない。人はとかく見たいと思うことしか、見ようとしないう癖がある。また、人は見たことを自分の都合が良いように解釈する癖がある。さらに、先入観や偏見、過去の成功体験に執着する癖がある。ものごとの解釈に恣意や都合を紛れ込ませてはならない。恣意や都合を紛れ込ませると、未来を見誤り、禍根を残し、害をなすのみである。未来を正しく知るには、今起きていることを、あるがままによく観察し、自分の知識に照らし合わせてその事柄や事象を虚心坦懐に観察し、その帰結を読み解くことである。

教養は、世の中で起きているものごとをよく観察し、分析し、洞察し、先見性をもってその事柄や事象の帰結はいかなるものか、人や社会にどのような影響を及ぼすのか、恣意や都合を紛れ込ませることなく読み解かなければならない。そして、いち早くいかなる未来が待ち受けているのか人や社会に知らせることができなければならない。

(2) 進むべき道を示す

これからの社会は変化が常態化し、未来がますます不透明、不確実なものになる。したがって、人や社会が未知のものごとに出会う頻度はこれまでよりも多くなる。ものごとは広域化・複雑化・専門化し、ものごとの真の姿を捉えることも、本質を掴むことも、問題解決もこれまでに以上に難しくな

るであろう。人や社会は岐路に立つたび、常に難しい判断や決定を迫られることになる。

ところで、変化が常態である時代にあっては、ある時点での最適な判断や決定もすぐに陳腐化し人の生活や社会の実態にそぐわなくなる恐れがある。したがって、今日のものごとの判断や決定においては、つぎのような注意をしなければならない。第一は判断や決定は小さく始めたほうが良いということである。初めから大きく始めると状況が変化したとき、その修正や変更により時間を要し人や社会に大きな混乱をまねく。第二には判断や決定は精緻にしてはならない。単純なものにしなければならない。精緻にすぎると一般の人には分からない。実際の役に立たなくなる。また、状況の変化に対して融通がきかなくなる。そして第三には、一時的に優れた判断や決定に刹那的、衝動的に飛びついてはならない。ものごとの価値は状況の変化によって反転する。常に多面的に見て判断し決定しなければならない。一時は良くてもいずれ後悔するときがある。

教養は、人や社会が岐路に立ったとき人や社会にとって「何が大切か」、「何をなすべきか」、「如何になすべきか」について考え抜き、人や社会に正しい判断と決定を示せなくてはならない。また、未知の問題に遭遇したときには知恵を出しその問題解決に貢献できなければならない。

6. いかにして教養を身に付けるか

教養を高めるには、いろいろな知識を数多く身につけることが必要である。では、知識や経験を数多く身につけるにはいかによいのだろうか。当たり前のことながら、自分で学び、経験を積んでいかねばならない。しかし、一人が活着ている間に学び、経験できることの数には限りがある。では、どうすればよいか。一つは先人の残した書物を読み、そこに書かれている知識や経験を咀嚼し、同化していくことである。書物を著した人は死んではいても、書物は活着ている人としてその人の知識をわれわれに教えてくれる。二つには異質に学ぶことである。異質には同質の中では気付かない、知りえないものの方や価値観が数多く詰まっているはずである。そして、最後は現実に学ぶことである。現実に生きてきた知識が満ち溢れている。「今」が詰まっており、「未来」が透けて見えてくる。これらの関係を図3に示す。

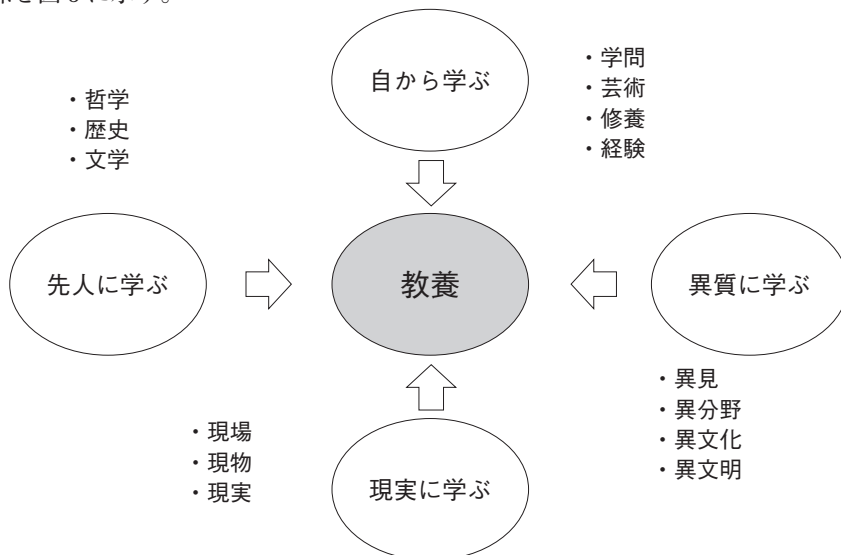


図3 いかにして教養を身に付けるか

6.1 自ら学ぶ

学問をし、芸術に触れ、人間的修養や人生経験を重ね、自ら努力をして地道に諸々の知識を積んでいくしかない。しかし、機械的な知識は自分のものにはならない。断片的な知識は役に立たない。知識を身につけるには、一つひとつの知識を自分なりに理解し、解釈し、洞察し、同化し、他の知識と関連付け、統合し、体系化していくことが必要である。

(1) 知識の獲得

人が知識を獲得する方法は三通りある。第一は、自らの五感（視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚）や身体を使って経験し体験することにより得るものである。第二は、ものごとの科学的な観察と実験あるいは論理的な分析と推論の結果として得るものである。第三には、人から話しを聞いたり書物を読んだりして身につけるものである。知識は経験や体験を通じて得たもの、あるいは科学的、論理的に説明できるものほど信じられる。知識は使われると新しい知識に出会う。そこで出会った新しい知識は、すでに在る他の知識と関連付けられることにより良く定着する。そして、新たに定着した知識がつぎの新しい知識に出会ってそれを定着させるという過程を繰り返すことにより、知識は雪だるま式に増えていく。知識を増やしたければ、雪だるまを転がすように知識を使うことである。

(2) 暗黙知と形式知

知識には暗黙知と形式知がある。前者は、言語・文章・図表、数式などで表現するのが難しい主観的、身体的な知である。特定の文脈ごとの経験、体験の繰り返しによって身につく熟練の技術やノウハウが該当する。暗黙知の例として自転車の乗り方がある。自転車の乗り方を人に言葉で説明するのは困難である。後者は、主に言語・文章、図表・数式などによって説明、表現できる客観的、理性的な知である。特定の文脈に依存しない一般的な概念や理論、問題解決手法がこれに該当する。形式知の例として教科書、マニュアルがある。暗黙知を人に伝えたり、逆に他人がこれを学びとったりすることはなかなか難しく。その伝承には、経験、体験、熟練を必要とする。暗黙知と形式知の関係を対比して表1に示す。

表1 暗黙知と形式知の対比

暗 黙 知	形 式 知
主観的な知（個人知）	客観的な知（組織知）
経 験 知（身体）	理 性 知（精神）
同時的な知（今ここにある知）	順序的な知（過去の知）
アナログ的な知（実務）	デジタルな知（理論）

出典 野中郁次郎・竹内弘高（著）、梅本勝博（訳）「知識創造企業」東洋経済新報社 2002年9月1日 第14刷発行 p.89

(3) 宣言的知識と手続き的知識

知識には宣言的知識と手続き的知識がある。前者は内容に関わる知識である。たとえば、「地球は丸い」「日本の首都は東京」「雪は冷たい」などが該当する。一方、後者は方法に関わる知識である。「自転車の乗り方」「バイオリンの弾き方」「鉋の使い方」などが該当する。前者は静的であり、後者は動的である。料理で喩えれば、内容にかかわる知識は肉や魚、野菜などの料理の素材にかかわるものであり、方法にかかわる知識は素材の料理方法にかかわるものである。いずれが乏しくとも美味しい料理はできない。一般に、宣言的知識（内容にかかわる知識）は形式知であり、手続き的知識（方法にかかわる知識）は暗黙知である。

(4) 強い知識と弱い知識

知識には強い知識と弱い知識がある。知識の強弱とは、自分がその知識に対してどれほどの確信と信頼をおくことができるかである。ものごとの判断や行動をするとき、確信でき、信頼できる知識が強い知識である。一般に自らの五感や身体を使って経験し体験することにより得た知識は強く、人から聞いたり、書物を読んだりして身につけた学びの知識はそれに比べると弱い。暗黙知は経験や体験に裏付けされた知識であり強い知識である。いっぽう、形式知はややもすると弱い知識になる。知識として頭の中で一応の理解はしていても、いざ重要な判断や行動をするときの礎とするには、いま一つ確信をもてず全幅の信頼をおくことができないことがある。しかし、弱い知識も実践や体験、観察や実験あるいは論理的な分析と推論を通じて同化できれば強い知識に転化できる。

(5) 知識と行動

知識は行動に結びついてはじめて意味をもつ。人の生活や社会は日々めまぐるしく変化している。ものごとはいろいろな要素が混じり絡み合い、どんどん複雑化している。したがって、知識は現実には即してすぐに取り出せて使えるものでなくてはならない。さらに、いろいろな事柄や変化に対して臨機応変に対応できるものでなくてはならない。そうすると、機械的、断片的、曖昧、雑駁な知識、現実にそぐわない死んだ知識、いざという時に信じるに足らない弱い知識では行動に結びつかない。したがって、知識が行動に結びつくためには、理解、解釈、洞察、選別、同化の過程を経て自分の中で明確になっている知識、現実に即した生きた知識、いろいろな知識と関連性を有し、統合、体系化された知識、そして、いざという時に信じるに足る強い知識でなくてはならない。

(6) 知識と知恵

知恵とは知識を使いこなす能力である。目的や状況に応じて既存の知識と知識の間に新しい関係性を発見し、新たな価値を生み出す能力である。静的には、それによって生み出される新しい価値でもある。たとえば、既存の方法では解けない問題の新たな解決法を見いだすことである。そして、この新たな解決法は新しい知識として人や社会に還元され、人や社会は知識の量を増やしていく。知恵、すなわち知識と知識の間に新しい関係性を見いだす能力は、一つのものと他のものごとの関連性や類似性を見いだす能力に等しい。したがって、知恵を高めるには、まずはいろいろな分野のたくさんの知識を身に付け、それらを観察し、分析し、洞察し、ものごとの関連性や類似性を発見する能力の習練を積んでいくことが必要となる。

6.2 先人に学ぶ

これまで、幾多の先人がそれぞれの知識や経験を哲学書、歴史書、文学書として今日に残してくれている。これらの書物を読むことにより、先人の知識や経験を理解し、解釈し、洞察し、選別と認知を行い、同化していく。

(1) 哲学とは

哲学とは人が置かれたその時々々の立場や状況によって主題は変わるのかもしれないが、「人とは何か」「人はいかに生きるべきか」など、根元的なものごとの真理を探るものではないだろうか。真理

を探るなどということは神のみがなしうる業だとは思いますが、人は分からないことを知りたがるものである。多くの哲人が真理を求めて辿り着いた答えはあまりにも高邁であり、深遠である。しかも、其処には一つの問いに対していろいろな答がある。人はどれを選べばよいかわからない。また、自分が今生きている現実の世界は先人が生きた世界とは異なる。さらに、人とは生活をしている生身の人間であり、それぞれ生きている立場や状況、生きるために何を最も必要としているかについても人それぞれに異なる。したがって、哲人の示唆する教えの全てをそのまま現実の世界に写し取ることではできない。しかし、人はいつも悩み、もがき、苦しみ生きていくなかで意思決定をし、道を選択していかなければならない。このようなとき、多くの哲人が残してくれた教えをそのまま写し取ることではできないかもしれないが、人が人生においてものを考え、悩み、生き方を定めていくときの一つの基準もしくは規範とすることができる。

(2) 歴史とは

歴史とは先人が現実に行ってきた幾千年にも渡る様々な営為の積み重ねである。人や社会が、ある状況に置かれたとき、何を考えどのような行動をしたか、またその行動が人や社会にどのような結果をもたらしたのかという事跡である。それらは先人の幾多の成功と失敗の経験である。「歴史は繰り返す」という言葉がある。過去に起こったことは、同じようにその後の時代にも繰り返し起こるとの意である。人の本性は昔も今も大きくは変わるものではない。したがって、今日の人も歴史上に起きたと同じような状況に置かれれば、先人と同じような行動をするということである。また、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉もある。愚者は自分で失敗して初めて失敗の原因に気付くが、賢者は過去の他人の失敗から学び同じ失敗をしないように事前に回避するとの意である。すなわち、歴史を学ぶことにより、人は先人の幾多の成功と失敗の経験を擬似的に体験することができる。歴史の紆余曲折をいかにして乗り越えたかという先人の知恵を学びとることができる。そして、これらの疑似体験や先人の知恵を自分の知識や体験をもとに咀嚼して内面化することにより知識を大きく膨らませることができる。これにより、それまでの知識や経験では処理できなかった問題にも対処できるようになる。さらに、これから何が起きるかという未来予測もし易くなるということである。

(3) 文学とは

文学とはある状況に置かれた生身の人の思想や感情、生き方や考え方を文字において表現したものである。概ね、個別な人間とある個別な状況の関係をとおして人が描かれることが多い。すなわち、人や社会との関係において人がある特異な状況に置かれたとき、何を考え、何を悩み、どのように生きていったかが描かれる。文学をとおして、世の中にはいろいろな人がいて、様々な特異な状況のあることを知る。一人ひとりが息苦しく、生き辛い状況の中で生きていることを知る。そして、人とはそのような特異な状況に置かれたとき何を考え、何をやるものであるか、さらに状況とは人にどのような影響を及ぼすものであるかということを知る。これらをとおし、人とは何か、社会とは何か、人と社会との関係性を知ることができる。文学の中にはいろいろな人生がある。それらをとおして、人生の多様性や多義性を知ることができ、心の奥行きを深めることができる。また、人は詩歌をとおして美意識や感性を磨くことができる。

6.3 異質に学ぶ

人は自分と同質のものは受け入れるが異質なものは拒み、排斥する傾向がある。それは、自分が慣れ親しんできたものとは異なるものの見方や価値観についての馴染がないため、それを理解し、納得することができず不信や不安、恐れを抱くがためである。しかし、異質と呼ばれるものの見方や価値観も、その世界に棲む人からすれば理に適ったことであるにちがいない。なぜなら、人とは自分にとって都合の悪いこと、利益にならないこと、為にならないことはしない生き物だからである。したがって、異質と呼ばれている世界も、そこに棲む人からみれば数多の同質で満ち溢れているに違いない。外から見れば異質なことも、内から見れば同質であり、内から見れば同質なことも外から見れば異質になる。

もし、自分の周りで見聞きすることが同じであるならば、そこから新しく学べることは多くはない。すなわち、同質から学びうるものには限りがある。一方、人が異質を「受け入れる」寛容さがあれば、そこから多くのことを学びとることができる。同質からは学ぶことのできないものの見方や価値観など新しい知識を身につけることができる。人が異質とを感じるものの中には、同質の世界では気付かない、知りえない、あるいは経験できない未知のことが数多く詰まっているはずである。なぜなら、これらの未知なるものこそが、人に異質を感じさせる理由だから。しかも、これらの異質なものの見方や価値観は奇異ではあるが、不合理なものではなく、ある立場や事情においては意味のあるそして合理的なものなのである。

なお、異質を「受け入れる」とは、そのことに全く従うということではない。「受け入れる」とは、第一に異質の存在を認める寛容さをもつということである。ものごとの見方や価値観は、立場や事情が違えばいろいろあることを認めることである。第二は、そのものの見方や価値観に沿ってものごとを理解してみるということである。そして、立場や事情が変われば見えてくるものが違うということを知ることである。最後に、そのような異質なものの見方や価値観をとおして見えてきたものを自分のもっている知識と照らし合わせて理解し、解釈し、洞察し、選別し、新たな知識として自分の中に統合していくことである。

6.4 現実に学ぶ

象牙の塔^{*15}とか永田町の論理^{*16}という言葉がある。しばしば、一般の人や社会とかけ離れたものの見方や価値観、常識や論理を持つ閉鎖社会を指す言葉として学問や政治の世界を揶揄して使われる。学問にしても、政治にしても人や社会のために存在している筈である。それが、人や社会の現実とかけ離れたものの見方や価値観、常識や論理でもって非現実的なことを言ったり、したりしてもらっては困る。現実に学びそれが求めているものを知り、人や社会の役に立ってもらわねばならない。

一方、三現主義という言葉がある。現場・現物・現実の三つの現を意味する。何か問題が発生したときに、机上でものごとを判断するのではなく、現場で現物を見て、現実を認識した上で問題解決を図るという考え方のことである。とかく人は、インターネットや新聞・テレビ・雑誌などのメディアからの情報や人から話を聞いて、ものごとを理解し、把握したつもりになる。しかし、これらメディアからの情報や人の話が全く役に立たないというわけではないが、ものごとを正しく伝えているかという少々疑わしい。まず、第一にそれらは記事になった時点ですでに過去の情報である。第二に、他の人の眼や知識をとおしたものの見え方である。第三には、ものごとの全体ではなく断片である。

多くのものを捨象している。「百聞は一見に如かず」という諺がある。人から百回繰り返し聞いても、自分で一回実際に見ることには及ばないとの意であるが、なにごと「自分の目で見て」「自分の耳で聞いて」「自分の肌で感じて」、初めて自分の知識、強い意識となる。

また、人はとかく見たいと思うことしか、見ようとしなない癖がある。人は見たことを自分の都合のよいように解釈する癖がある。さらに、先入観や偏見、過去の成功体験に執着する癖がある。人は本来個人的生物であり自己中心的であるがため、こうした陥穽にはまりやすい。ものごとの理解、解釈、洞察に恣意や都合を紛れ込ませると、ものごとの真の姿を見誤る。いつまでも禍根を残し、害をなすのみである。この陥穽から抜け出す方法は、現実に関を背けることなく直視することである。そして、恣意や都合を排除することである。そうでなければ、虚偽と独善が身につくだけで、知識とはなりえない。

教養は現実の人の生活や社会に役立てるためにある。今日の人の生活や社会は日々変化している。したがって、人が社会でより良く生きるために身につけておくべき知識も日々変化する。生きた知識は現実の中からしか手に入れることはできない。人は現実を「見て、聞いて、感じる」ことで、今、人や社会の中で何が起きているか、人や社会が何を求めているかを知ることができる。現実には「今」が詰まっており、現実からは「未来」が透けて見えてくる。

7. おわりに

今日の人や社会は連帯感・一体感を喪失している。連帯感や一体感のない社会は何事も成しえない。小田原評定^{*17}となり、人の意見はまとまらず、社会の進むべき方向が定まらない。共通の価値観として人や社会の中心に置き、連帯感・一体感を醸成しうるものとして教養がある。ところで、人とは帰属する社会や組織が求めているもの、価値ありとするもの、重視するもの、評価するものに、自分のものの見方や考え方、態度や行動様式を適合させていくものである。そして、この共通のものの見方や考え方、態度や行動様式がその社会や組織の文化、価値観となっていく。したがって、教養を共通の価値観とすることを望むならば、教養を価値ありとし、重視し、評価し、尊重するという機運を社会全体に広め、高めていかななくてはならない。

教養を社会の共通の価値観としていくには社会の各分野、各層の合意と団結を必要とする。家庭、学校、企業、地域、行政が絆を強め、一体感をもって教養教育に取り組まなければならない。とくに、学校の教育者、企業の指導者が果たす役割は大きい。教養の個人的意味、社会的役割、重要性を強く認識し、教養を人や社会の中に育む使命感と責任感を強く持って取り組まなければならない。教養は一朝一夕に身につくものではない。「千里の道も一歩から」という。個人としては人がその一生、半世紀をかけて築き高めていくものである。また、教養は社会の生活習慣や規範、価値観等に根ざした一種の文化であり、社会文化を作り上げるのには時間がかかる。教養の再生には相当の時間とエネルギーがいる。覚悟をもって一歩一歩前進するしかない。

註

- * 1 (1)学問、幅広い知識、精神の修養などを通して得られる創造的活力や心の豊かさ、物事に対する理解力。また、その手段としての学問・芸術・宗教などの精神活動。(2)社会生活を営む上で必要な文化に関する広い知識。小学館 大辞泉
- * 2 汚職（贈収賄）、談合、粉飾決算、欠陥商品販売、保険金不払い、不正貸付・取立て、食品・産地偽装など
- * 3 ワーキングプア（working poor）。正社員並み、あるいは正社員としてフルタイムで働いてもギリギリの生活さえ維持が困難、もしくは生活保護の水準にも満たない収入しか得られない就労者の社会層のこと。小学館 大辞泉
- * 4 学問とは広い言葉で、精神を扱うものもあるし、物質を扱うものもある。修身学や宗教学、哲学などは精神を扱うものである。天文、地理、物理、化学などは物質を扱うものである。いずれも知識教養の領域を広くしていった、物事の道理をきちんとつかみ、人としての使命を知ることが目的である。知識教養を広く求めるには人の話を聞いたり、自分で工夫をしたり、書物を読むことが必要だ。中略 実生活も学問であって、実際の経済も学問、現実の世の中の流れを察知するのも学問である。福澤諭吉 斎藤孝訳「現代語訳 学問のすすめ」筑摩書房 2009年2月25日 第2刷発行 p.22
- * 5 人間特有の本性。人間として生まれつきそなえている性質。人間らしさ。小学館 大辞泉
- * 6 儒教の教えに五常の徳がある。人が人として常に守るべき道として仁・義・礼・智・信の五つの徳を示している。仁とは他人に対する思いやり、優しさ、慈愛の心をもつこと。義とは人としての正しい行いを守ること。礼とは人との関係を円滑にし、社会の秩序を維持するための礼儀や節度を守ること。智とは人としてのものごとの正邪を区別できる知識や知恵をもつこと。信とは約束を守り、心と言葉、行いを一致させて人からの信頼を得られること。
- * 7 物事を深く見通し、本質をとらえる、すぐれた判断力。ある物事に対する確かな考えや意見。小学館 大辞泉
- * 8 安岡正篤「運命を開く」プレジデント社 2007年7月19日 第35刷発行 p.63参照
- * 9 「いかに生きるか」という問いを立てる必要がなく、人生を大過なく渡っていた人々は数多くいたのである。それらの人々のことを考慮に入れ、「教養」の定義をするとすれば、次のようになるであろう。阿部謹也「教養」とは何か」講談社現代新書 2002年7月 第10刷発行 pp.55-56参照
- * 10 ジェームス・ウェブ・ヤング「アイデアのつくり方」(株) 阪急コミュニケーションズ 2006年7月19日 pp.27-29参照
- * 11 田村正紀「今から教養を身につけるにはどうすべきか」雑誌プレジデント プレジデント社 2003.2.3号 pp.110-111参照
- * 12 身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務があるという、欧米社会における基本的な道徳観。もとはフランスのことわざで「貴族たるもの、身分にふさわしい振る舞いをしなければならぬ」の意。小学館 大辞泉
- * 13 P.Fドラッカー 上田惇生（編訳）はじめて読むドラッカー【自己実現編】「プロフェショナルの条件」ダイヤモンド社 2004年5月18日 第39刷発行 p.224 参照
- * 14 P.F.ドラッカーは「すでに起こった未来」は以下の領域を体系的に調べることにより見つけられるとしている。(1) 人口構造 (2) 知識の領域 (3) 他の産業、他の国、他の市場 (4) 産業構造 (5) 企業の内部 P.F.ドラッカー 上田惇生（編訳）はじめて読むドラッカー【マネジメント編】「チェンジ・リーダーの条件」ダイヤモンド社 2004年11月12日 第16刷発行 pp.198-200参照

- *15 芸術至上主義の人々が俗世間を離れて楽しむ静寂・孤高の境地。また、現実から逃避するような学者の生活や、大学の研究室などの閉鎖社会。フランスの文芸評論家サント＝ブーブがビニーの態度を評した言葉。
- *16 国政の中心である国会が千代田区永田町にあることから、国会議員のものの考え方が国民とかけ離れていることを永田町の論理という。
- *17 いつになっても結論が出ない会談や相談のことをいう。天正18年（1590）、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めた際、城中で和戦の意見が対立し、いたずらに日時を送ったという故事による。

参 考 文 献

- 平松琢弥「豊かなコミュニケーションの創造に向けて」熊本大学文学部論叢 第91号コミュニケーション情報学科篇 2006年 pp.63-76
- 平松琢弥「ビジネスコミュニケーションとは」熊本大学文学部論叢 第95号コミュニケーション情報学科篇 2007年 pp.87-119
- 平松琢弥「リーダーシップとは誰のものか」—リーダーの影響力とフォロワーの共感力—
熊本大学文学部論叢 第99号コミュニケーション情報学科篇 2008年 pp.47-71
- 平松琢弥「ネットワーク社会の情報モラル—21世紀の社会基盤—」熊本大学文学部論叢 第100号
2009年 pp.175-193
- 阿部謹也「[教養]とは何か」講談社 2002年7月5日 第10刷発行
- 苅部直「移りゆく[教養]」NTT出版 2007年10月5日 初版第1刷発行
- 竹内洋「教養主義の没落」中央公論新社 2009年5月15日 11版
- 羽田功（編）「[教養]考える —現代を読み解くために—」慶應義塾大学教養教育センター 2003年9月
30日 初版第1刷発行
- 藤原正彦「教養立国ニッポン」文藝春秋 2007年12月1日 発行
- 林望、茂木健一郎「教養脳を磨く」NTT出版 2009年4月13日 初版第3刷発行
- 中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」2002年2月2日
- 福澤諭吉 斎藤孝訳「現代語訳 学問のすすめ」筑摩書房 2009年2月25日 第2刷発行
- 松下幸之助「物の見方考え方」実業之日本社 2008年1月15日 初版第9刷発行
- 笠信太郎「21世紀の日本人へ」昌文社 1998年12月25日 初版
- 山脇直司「公共哲学とは何か」筑摩書房 2010年6月25日 第6刷発行
- 松下幸之助「指導者の条件」PHP研究所 2006年12月4日 第1版第14刷発行
- 福田和也「人間の器量」新潮社 2009年12月10日 発行
- 藤原正彦「国家の品格」新潮社 2006年2月15日 15刷
- 安岡正篤「運命を開く」プレジデント社 2007年7月19日 第35刷発行
- 童門冬二「人望力の条件」講談社 2006年9月1日 第11刷発行
- D.カーネギー（著）山口博（訳）「人を動かす」創元社 2004年10月20日 新装版第23刷発行
- 守屋洋「菜根譚」PHP研究所 2007年4月2日
- 中西輝政「本質を見抜く考え方」サンマーク出版 2008年1月25日 第7刷発行
- ジェームス・ウェブ・ヤング「アイデアのつくり方」（株）阪急コミュニケーションズ 2006年7月19日
- ダニエル・ピンク 大前研一（訳）「ハイコンセプト」三笠書房 2006年5月20日 第1刷発行
- P.F.ドラッカー 上田惇生（編訳）はじめて読むドラッカー【自己実現編】「プロフェッショナルの条件」

- ダイヤモンド社 2004年 5月18日 第39刷発行
- P.F.ドラッカー 上田惇生（編訳）はじめて読むドラッカー【マネジメント編】「チェンジ・リーダーの条件」ダイヤモンド社 2004年11月12日 第16刷発行
- P.F.ドラッカー 上田惇生（編訳）はじめて読むドラッカー【社会編】「イノベータの条件」ダイヤモンド社 2000年12月14日 初版発行
- ダニエル・ゴールマン、リチャード・ボヤツィス、アニー・マッキー、土屋京子（訳）「EQリーダーシップ」日本経済新聞社 2002年 8月 6日 第4刷発行
- 野中郁次郎、竹内弘高「知識創造企業」東洋経済新報社 2002年 9月 1日 第14刷発行
- 山内昌之「歴史の中の未来」新潮社 2008年 9月25日
- 山岸俊男「安心社会から信頼社会へ」中央公論新社 2009年 2月15日 7版
- 佐伯啓思「日本という「価値」」NTT出版 2010年 8月 5日 初版第1刷発行
- 小林傳司「トランス・サイエンスの時代」NTT出版 2007年 6月27日 初版第1刷発行
- 小嶋光昭「日本の倫理融解」星雲社 2007年 5月15日 初版第1刷発行
- 山田雅弘「ワーキングプア時代」（株）文藝春秋 2009年 6月15日 第1刷発行